

「面白さ」を見だし、チャレンジした農業。じっくりリミットアップ、着実にステップアップ

〜関 浩一さん・真紀さん（むかわ町）

市民農園との出会いが 転機に

胆振管内むかわ町は、町、農協、関係機関で組織するむかわ町地域担い手育成センターの手厚い受け入れ体制もあり、これまで9戸が就農を実現している。そのうちの1戸が関浩一さん（50歳）、真紀さん（50歳）夫婦だ。平成25年11月に就農し、1haでトマトとレタスをハウスで栽培。残りの1haでソバ、カボチャ、緑肥を輪作する。就農して4年目を迎えるが「農業は飽きることがないですね」と、しみじみ語る2人。子どもの頃から両親の転勤で地方を回ることも多かったという浩一さんは、「田舎暮らしが性に合っています。あとは、ホタルがいれば言うことなしです」と笑う。



「計画通りに作業や生産が進み、そこに収益が乗ればさらにうれしいですね」と話す関 浩一さん



トマトの出荷は7月下旬～11月初旬まで。その後、12月からレタスの定植が始まり5月まで出荷する

て」と浩一さんの決断を後押し。そして22年、旧北海道農業担い手育成センター（現、(公財)北海道農業公社）の講演会や新・農業人フェアに



定植を待つトマトの苗を管理する浩一さん。この時期は、肥料が少し足りないと感じるくらいだが、根の活着が良いという



担い手育成センターの藤田泰地さんと栽培技術の情報交換

参加し、本格的に就農に向けて動いた。就農地の決め手になったのは、むかわ町が札幌市から比較的近場であり、年間を通じた生産・出荷スケジュールが組めたこと。そして、新規就農者に対する研修制度が充実していたからだ。同町では、まず町内の生産者の農場で短期（2泊3日～1カ月）と長期（3カ月～2年程度）の農業体験を実施。その後、鶴川研修農場（通称、豊城ファーム）で2年の実践研修に臨む。浩一さんは「農業体験は農業を仕事にすることの自覚と、地域の人たちから信頼を得るステップ。実践研修は、経営者としての考え方や技術経験を積むステップになりました」と振り返る。特に実践研修では周囲のアドバイスはあるが、資材の手配や肥培管理など、ほぼ自分で考えて行動しなくてはならない。通年の流れを把握し、



トマトの苗は育苗センターを活用。品種は「りんが」



定植したトマトに支柱を立てる。ハウス全長は少し長めの70mにしている

自然と作業の段取りを考えられるようになっていたことが、就農後に非常に役立つたそう。

一つ一つの作業に 面白さがある

浩一さんの農業に向かう姿勢は、「じっくりこつこつ、真面目に」。中でも売り上げの主力となるトマトは、こまやかな病害虫対策を心掛けている。特に、葉の成長に影響を及ぼすだけでなく、せつかく実った果実にもダメージを与えるアザミウマ（スリッパス）やヨトウムシには注意し、虫が舞いやすい牧草の刈り取りシーズンには、近隣農家の作業の様子にも気を配って先手を打つという。自身が消費者だった頃を思い出すと、きれいな作物を選びたくなる気持ちがかかる。その視線を忘れずに、品質の高い作物づくりを目指しているのだ。

そうやって一歩ずつ栽培技術を身に付けている浩一さんだが、「とはいっても、実際はなかなか手が回らない時もあります。もう少し要領よく作業したいですね」と自己分析する。当面の目標は、トマトとレタスをしっかりと栽培できるようにすること。5～10年先を見据え、ゆくゆくはアスパラやミニトマトなど、時流に合った作物を手掛けることを検討中という。関さん夫婦の農場では今年5月、体験農場として東京からの就農希望者を受け入れた。自分たちを快く迎えてくれた町で「今度は自らが受けて就農を目指す人たちに、先輩としてアドバイスするならば「楽しさだけでなく、面白さを見いだすことかな」と浩一さん。「定植や収穫の表面的な楽しさには、いつか飽きる日が来るかもしれません。ですが、他のさまざまな作業の中にもやりがいや奥深さを感じられると、農業を仕事にできるのだと思います」と持論を語ってくれた。そして、「何といたって、自分たちの思い通りにいかないところ。自然相手だから農業は面白いんですよ」と目を細める真紀さんを見て、浩一さんも大きくうなずいた。